

# 小学校英語教育における「書くこと」の指導の工夫

M17EP008

藤城 妙子

## 1. はじめに

中学校段階の「文字を使用した英語の学習」にうまく適応できず、アルファベットを正確に綴れないまま高校に入学してくる生徒に毎年出会う。表1に示す新学習指導要領小学校外国語「書くこと」の目標Aを達成できていない状態で高校に入学してきた生徒である。これらの生徒は高校入学時にアルファベットの形の認識や読み方が定着しておらず、文字と音が一致しなかったり、正確に綴ることができなかつたりする。

このような生徒の中には英語への興味・関心が低く、新学習指導要領中学校外国語の目標「(3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度」が、十分に育っていない者がいる一方で、「書くこと」は苦手であるが、使える英語を駆使してなんとか思いを伝えようと積極的にコミュニケーションを図ろうとする者がいる。

そこで、小学校における音声を中心としたコミュニケーションの体験を生かし、中学校高校における文字を中心としたコミュニケーションへとスムーズに接続する必要があると考える。小中高で連携し、児童・生徒が過度な負担感を感じることはないような段階を踏んだ指導法、および意欲をもって「書くこと」に向き合えるような指導法を確立したい。

## 2. 研究の目的

平成29年3月に小・中学校の新学習指導要領が公示された。小学校において、中学年に「外国語活動」、高学年に「外国語科」が導入された。「外国語科」では、「聞くこと」、「話

すこと」の活動に加え、「読むこと」、「書くこと」の活動が加わった。野呂(2007)は、「文字指導」の必要性を「低学年児童は知覚的直感、身体運動や具体的な経験から学習していくが、……高学年の児童は抽象概念を理解し、分析する力を身に付け、興味・関心をますます文字へ向けるようになる。そのような文字への興味や知的な欲求に応じた指導をする必要がある」とまとめている。

また、平成28年度「英語教育改善のための英語力調査事業(中学校)」報告書によると、「公立学校の『書くこと』における0点の答案のうち、そのほとんどが白紙であった」(文部科学省, 2016)ことが報告されている。さらに、「中高生の英語学習に関する実態調査2014」でベネッセ教育総合研究所が示すように、「多くの中高生は英語の文を書くのが難しい」とつまずきを感じていることが分かる。

学習指導要領では、小中高それぞれの「書くこと」の目標を表1のように設定しているが、自分自身の授業をふり返ると、中学校高校での目標の達成度は高くない実感がある。

そこで、本研究では、「外国語科」が導入され、アルファベットの学習が始まる小学校における「書くこと」の指導で、どのような工夫をすることが可能かを考え、その実践と検証を行う。その際、どのようにしたら外国語活動で身につけた「音」の財産を「書くこと」の指導に生かすことができるか、具体的にその方策を探る。また、「書くこと」もコミュニケーション活動の一つであるという中学校外国語の目標(3)の視点から、「書くこと」に対するモチベーションについても考察する。

小学校での実践を通して、児童・生徒の「書くこと」の能力を高めることができるような

指導法について考えをまとめ、高校の入学期における「書くこと」の指導の改善につなげていきたい。

表1 小中高の「書くこと」の目標

<p>「小学校外国語」</p> <p>ア 大文字、小文字を活字体で書くことができるようにする。また、語順を意識しながら音声で十分慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする。</p> <p>イ 自分のことや身近で簡単な事柄について、例文を参考にし、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことができるようにする。</p> <p>(平成29年新学習指導要領)</p> <p>「中学校外国語」</p> <p>ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて正確に書くことができるようにする。</p> <p>イ 日常的话题について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある文章を書くことができるようにする。</p> <p>ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて書くことができるようにする。</p> <p>(平成29年新学習指導要領)</p> <p>「高校」英語表現 I</p> <p>英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を養う。</p> <p>(平成21年学習指導要領)</p>
--

### 3. 研究の方法

#### (1) 対象

山梨県内の公立小学校1年生および6年生

#### (2) 期間

平成29年5月～12月(週1回)

#### (3) 実施方法

##### ① 参与観察、アンケートによる実態把握

週1回の授業参与観察、6年生への事前アンケートで児童の実態把握を行う。

対象校のある山梨県内のA市は、文部科学省より平成21年度に「小学校において英語を教科として扱う特例校制度」の指定を受けて英語教育を開始した。対象校は平成24年度より1年生から教科としての英語教育を開始した。

A市には表2に示す「A市版小学校英語科学習指導要領」があり、独自の教育課程を有している。「書くこと」の指導もこの教育課程に従って実施されている。また、評価の観点を設定し、評価の実施もしている。

授業はT1(学級担任)、T2(日本人英語指導助手)、ALT(外国語指導助手)の3人で実施されている。

##### ② 授業実践

1年生3学級(9月～12月の計21時間)および6年生2学級(10月～11月の計8時間)でT1として授業実践を行う。単元計画や単元の目標等は「A市版小学校英語科学習指導要領」に従って、授業を実施する。ただし、単元に関わる「書くこと」の授業計画のみ、筆者が作成する表3、表5の計画に従って実施する。

### 4. 研究の結果と考察

#### (1) 実践1 1年生における授業実践

##### ① 児童の実態把握

1年生は年間15時間の英語の授業が計画され、「A市版小学校英語科学習指導要領」に従って、授業が実施されている。月に1～2時間程度の英語の授業で、どのくらい

児童が英語に親しむことができるのか、授業中および休み時間等の児童の様子を観察し、次のような内容を見取ることができた。

児童の英語に対する興味・関心は大変強く、ALT との交流をとっても楽しみにしている様子が見られた。ALT は、休み時間に校庭で児童と遊んだり、毎日違う教室を回って一緒に掃除をしたりするなど、授業以外の場面で児童との良好な関係を築くことができるように心がけていた。このような毎日の積み重ねが、英語の授業によい影響を与えていることは間違いない。ほぼすべての児童が「英語は楽しい」という気持ちをもって、積極的に授業に参加できていた。

一方で、まだまだ「話したい、聞いてほしい」という気持ちが強い時期であるため、友だちの発言を上手に聞くことができない場面もあった。授業を円滑に進めるためには、「話したい、聞いてほしい」という児童の気持ちを受けとめながら、児童が大好きなじゃんけん等を使い、順番に話すことができるような配慮が必要だと考える。

表2 A市版小学校英語科学習指導要領

「書くこと」の目標	
高学年	アルファベットを手がかりにして、単語を書き写すことができる。
中学年	アルファベットの小文字・大文字を書き写すことができる。(小文字: 3年生, 大文字: 4年生)
低学年	実施せず

「評価の観点」  
**【表現の能力】** 英語で話したり、文字や簡単な単語を書いたりして、表現している。

表3 「書くこと」の単元計画(1年)

◎「A市版小学校英語科学習指導要領」では、低学年で「書くこと」の指導を実施していない。そこで本研究では、「書くこと」の指導開始前の「英語の文字に慣れ親しむ活動」として、コンビニエンスストア等の児童がよく知っていると思われるロゴを活用した「ロゴクイズ」を実施した。ロゴの活用については、長瀬・長瀬(2013)を参考にした。

◎目標

- ◆身の回りにある英語の文字に親しもう。
- ◆日本語と英語の音の違いを知ろう。

- 第1回 LAWSON のロゴから文字を隠し、正しい文字はどれか4択で選ぶクイズ
- 第2回 PIZZA-LA のロゴから文字を隠し、正しい文字はどれか4択で選ぶクイズ
- 第3回 SEVEN ELEVEN のロゴの ELEVEN を用いて、E/LEV/En に分割したカードを正しく並べかえるクイズ
- 第4回 Family Mart のロゴの Family を用いて、Fam/i/ly に分割したカードを正しく並べかえるクイズ
- 第5回 SEVEN ELEVEN の E/LEV/En の音節ごとに手を叩きながら、英語のリズムを感じる読みの活動
- 第6回 Family Mart の Fam/i/ly の音節ごとに手を叩きながら、英語のリズムを感じる読みの活動
- 第7回(研究授業) McDonald's の Mc/Don/ald's の音節ごとに手を叩きながら、英語のリズムを感じる読みの活動

②授業実践

(i) 第1回と第2回は、それぞれ LAWSON と PIZZA-LA の文字を4択で選ぶクイズを出した。学校の周りにある店のロゴをクイズとして選んでいるので、すべての児童がどこの店のロゴであるかはすぐに分かった。毎日見ているロゴであるとはいえ、どれだけ注意深く見ているのだろう

かと考えたが、クイズを実施した3クラスとも、挙手をさせるとほぼ全員が正しい文字を答えることができた。

正解した児童の中には、学校外の英語学校へ通っている者もいるが、ごくわずかである。また、日常生活でよく目にするABCやSMLなどの文字を読むことができる児童はいるが、単語を読むことのできる児童は見られない。したがって、児童はロゴを文字として判断したというよりは、イメージとして文字をとらせ、正しい答えを選択したと考えられる。



第1回



第2回

(ii) 第3回から第6回は、単語の音節を利用したクイズである。SEVEN ELEVENのELEVENとFamily MartのFamilyの部分の音節に分けたカードを準備する。ロゴを思いだしながら、正しい単語になるようにカードを並べかえるクイズである。カードを2セット準備し、各クラス2人の児童がカードを並べかえてクイズに答えた。1人で解答する児童もいれば、2人で相談する児童もいた。慣れ親しみのためのクイズなので、児童が答えやすいように細かいルールは決めなかった。

E-LEV-Enは難しかったようで、ほとんど正解者はいなかった。一方、Fam-i-lyは最初の文字のみが大文字で、形として特徴的だったのかほぼ全員が正解した。

また、日本語と英語の音の違いを感じるための活動として、音節ごとに手を叩きながら、単語を発音する練習を行った。まず、日本語の「イレブン」を、文字の数と同じだけ手を4回叩きながら発音する。次に、英語の「ELEVEN」を音節ごとに手を3回叩きながら発音する。児童はすぐに、日本

語と英語の音が違うことに気づき、そして、叩く手の数が違うことにも気づいた。明示的に音節の指導をしなくても、児童は日本語と英語の音の違い、リズムの違いを十分に感じる事ができたと考える。



第3回・第5回



第4回・第6回

(iii) 第7回は、Mc Donald'sのロゴを用いて活動を行った。これまでのSEVEN ELEVENやFamily Martの日本語と英語の音の違いに比べると、McDonald'sの日本語と英語の音の違いははるかに大きい。児童は、この大きな音の違いに非常に驚いている様子だった。さらに、叩く手の数も日本語では6回なのに対し、英語では半分の3回だという事実には驚き、友だちと何度も繰り返し手を叩いて発音していた。



第7回

ロゴを用いた活動について、3学級の担任の感想を挙げる。

- ・児童が毎日の生活の中で目にすることの多いロゴを使ったクイズは、英語の文字への興味・関心を引き出すので、本格的な「書くこと」の指導が始まる前の活動として、取り組みやすい。
- ・マクドナルドのように、日本語と英語の音やリズムが大きく異なるものを扱うことにより、児童に気づきや驚きの機会を与えることができる。このような積み重ねが、児童の学びを豊かなものにすると思う。

・低学年はクイズが大好きなので，導入に取り入れることで，よい雰囲気での授業が展開できる。

今回のロゴクイズは，あくまでも「書くこと」の指導が始まる前の文字への親しみを目的にした活動である。各回とも授業開始5分程度の活動である。毎回のクイズを児童はとも楽しみにしていた。英語のクイズを用いることで児童の気持ちが英語に向かう様子や，児童が文字や音にこれまで以上に興味を示すようになった様子が見られたことも成果である。また，担任の感想もロゴクイズに肯定的であった。目標である「身の回りにある英語の文字に親しもう」，「日本語と英語の音の違いを知ろう」は十分達成できたと考える。

## (2) 実践2 6年生における授業実践

### ①児童の実態把握

6年生は年間50時間の英語の授業が計画され，「A市版小学校英語科学習指導要領」に従って，週に1～2時間程度授業が実施されている。1年生から英語の授業の経験があり，T1が交代しても，T2とALTはこれまで慣れ親しんできた先生であることから，大きな不安もなく授業に参加することができているようだった。

第1回の授業で，英語について，簡単な事前アンケートを行った。質問項目を以下に示す。(6年生1・2組，55名)

表4 事前アンケートの結果

① あなたは英語が好きですか。			
好き	普通	嫌い	
28名	26名	1名	
② 今，自分が英語を使って一番できることは何だと思いますか。			
話すこと	聞くこと	読むこと	書くこと
6名	20名	9名	20名

③ 英語の授業で一番楽しい活動は何ですか。

話すこと	聞くこと	読むこと	書くこと
26名	19名	4名	6名

④ 英語の授業で一番難しいと感じる活動は何ですか。

話すこと	聞くこと	読むこと	書くこと
15名	13名	15名	12名

⑤ 英語を使って一番できるようになりたいことは何ですか。

話すこと	聞くこと	読むこと	書くこと
31名	0名	14名	10名

英語が好きな児童が多く，「話すこと」や「聞くこと」を中心とした活動に楽しみながら参加し，自分でもその力が身につけていると実感することができている。

対象校では，中学年から「書くこと」の指導を行っているため，「書くこと」の経験が豊富で，得意だと考える児童が多いことは特徴的である。また，「聞くこと」ができるようになりたいと答えた児童はひとりもいないが，これは「聞くこと」中心の授業展開で，徐々に「聞くこと」ができるようになってきているという達成感が児童の中にあるからだと考える。

「読むこと」や「書くこと」ができるようになりたいと考える児童も多くいることから，本研究では，児童の「書きたい気持ち」を育てられるような「書くこと」の指導の工夫を考えたい。

### ②授業実践

「A市版小学校英語科学習指導要領」の計画に従い，「できることを紹介しよう」という助動詞canを学ぶ単元で授業を実施した。今回の「書くこと」の指導は，授業の終わり10分～15分程度で行った。「A市版小学校英語科学習指導要領」の授業案で

は毎時間5分程度で「書くこと」の指導が計画されているので、授業の展開を工夫し、「書くこと」の指導時間を確保した。表5に示すように目標を設定し、「音」を使いながら語句や表現に十分慣れ親しんでから「書くこと」の活動を行った。また、第1回の授業で最終的なゴールである「自分のできることを伝える自己紹介文」のサンプルを提示して、児童が単元の目標をイメージできるようにした。さらに、「読み手（筆者）」の存在を意識できるように、「みんなのことをいろいろ知ることができるのが楽しみだ」等の声かけをして、「書くこと」の理由づけを行った。

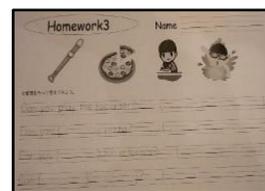
表5 「書くこと」の単元計画（6年）

◎目標
◆自分のできることを伝える自己紹介文を作ろう。
◆読み手がいることを意識して書こう。
第1回 動作を表す語の書き取り
♪音節を意識しながら読む指導
第2回 スポーツを表す語の書き取り
♪音節を意識しながら読む指導
第3回 can を用いた文の書き取り
♪音節を意識しながら読む指導
第4回 自己紹介文を仕上げる
♪スペースを意識できるような指導 （分かち書き）

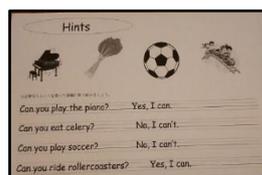
授業プリントを準備し、語から文へ、なぞり書きから写し書きへ、というスモールステップで進めた。プリントにはたくさんの絵・イラストを用いて、児童が取り組みやすいように工夫をした。また、宿題を活用することで、学習の定着を狙った。児童が宿題に取り組むことで「書けた」という達成感を味わえるように、裏面にヒントを印刷して授業で学んだことが思い出せるように配慮した。



授業プリント



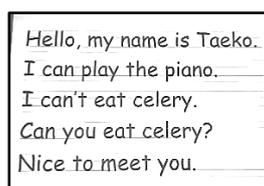
宿題プリント



宿題のヒント（裏面）

第1回は、まず自己紹介文のサンプルを提示し単元のゴールを示した。「書くこと」はコミュニケーション活動の一つである。「読み手（筆者）」の存在を意識して、双方向のコミュニケーションが成り立つように設定した。また、動詞の書き取りとあわせて、単語の音節で手を叩きながら発音の練習を行った。書き取りは、なぞり書きから手本を見ながらの書き写しへと段階を踏んだ。ゴールの自己紹介文の作成を見通して、自分ができることを書く活動も行った。

第2回は、スポーツ等を表す名詞の書き取りを行った。手順は第1回と同様であるが、質問文をなぞり、自分の答えを書くような場面も準備した。



自己紹介文サンプル



第3回

第3回は、文の書き取りを指導した。第2回にひき続き、質問文をなぞってそれに答えたり、空欄に適当な語を考えて埋めながら英文を書いたりした。加えて、re-cord-er と piz-za の2語を用いて、音節で手を叩きながら英語のリズムを意識して発音する練習を行った。

第4回は、自己紹介文を完成させる回である。「Canyouplaytherecorder?」と聞くときにはひと塊に聞こえる文も、実は5語から成っている。児童の目の前で紙を切り、スペースを作ってみせた。読み手が読みやすいように書くためには、分ち書きが必要であることを、児童には「読む人を思いやる」という視点から、スペースを捉えることができるように指導した。



第4回 はさみで切ってスペースを作る

これら4時間の授業を通じて共通している指導は、①音声で十分慣れ親しんでから書く活動へ、②「語から文へ」、「なぞり書きから書き写しへ」と段階的に書かせる、③絵・イラストをたくさん使う、④授業後の活動として宿題に取り組みさせる、⑤読み手を意識させる、の5点である。表6に、児童の授業後のアンケート結果を示す。

表6 事後アンケートの結果

問 授業で行った「書くこと」の活動のために役だったことはありますか。(複数回答) (名)

単語や文を声に出して読むこと	38
手を叩いて英語のリズムを知ること	30
単語やスペースを意識すること	42
読む人がいることを意識すること	30
宿題でくり返し書くこと	40
プリントにたくさん絵があること	16

<児童の感想>

「手を叩いてリズムをとりながら書くと、書きやすい。」

「声を出して読みながら書いたので早く覚えられた。」

「(なぞり書きできれいに書けたので)今度は、なんにも見ずに書けるようになりたいです。」

「すらすら書けるようになって楽しかったし、また書きたいと思った。」

「スペースを意識したり、読む人がいることを考えて、ていねいに書いたら上手に書けた。」

「プリントに絵・イラストがたくさんあったり、宿題にヒントがあつたりしてよかった。」

\*表にある工夫について言及した感想の例

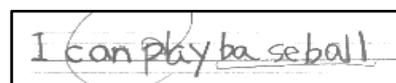
音声を用いて語句や表現に慣れ親しむ活動を「書くこと」の活動前に十分行うことで、児童はスムーズに「書くこと」に取り組むことができる。表6に示す児童の感想にも「手を叩いてリズムをとりながら書くと、書きやすい」という感想もあることから、このような音節を意識した音声の取り入れ方の可能性もあると考える。

また、プリント等に絵・イラストを多用することで授業の内容を思い出すことができ、「書くこと」に取り組む際の助けになる。さらに、「読み手(筆者)」を意識しながら「書くこと」によって、文の読みやすさやスペースの位置についても考えるようになったことが分かる。

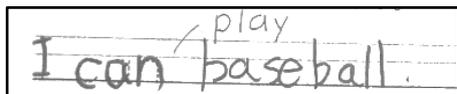
表6に示すように、宿題の取り組みにも児童は前向きな感想を述べている。「宿題をやらされている」のではなく、「上手に書きたい、伝えたい」気持ちが育っていると読み取れる。

事後アンケートや児童の感想からは、今回の授業での取り組みが肯定的に受け取られている。しかし、わずか4回の授業なので実際にどれだけ児童の「書くこと」の力が向上したかの判断は、なかなか難しい。次に示すのは、児童Xの第1回の授業プリントから第4回の自己紹介文(完成版)への変容である(宿題を含む)。「文字をていねいに書けるようになったこと」と「スペースを適切にあげられるようになったこと」が最も大きな成長である。

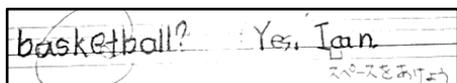
第1回授業 baseballのスペースが不適切



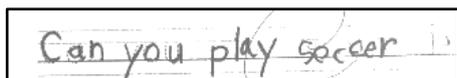
第1回宿題 動詞の欠落



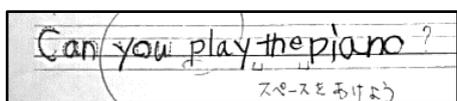
第2回授業 I can のスペースが不適切



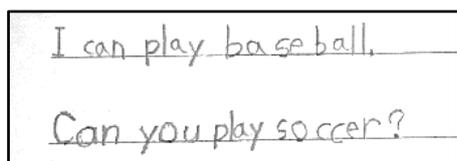
第3回授業 疑問符(?)忘れ



第3回宿題 スペースが不適切



第4回 完成した自己紹介文



以下に、4時間終了後の担任の感想を示す。

- ・書く前に「音声」を意識した活動を十分に行ったので、スムーズに書く活動に入ることができた。
- ・もともと「書くこと」に意欲的な児童が多かったが、今回の授業を通して「読み手意識」を持って書くようになったことは、大きな変化である。
- ・これまで英語を宿題にしたことはなかったが、とてもよく取り組んでいた。また、宿題だけでなく自主学習ノートにも単語の書き取りなどを練習する児童が見られ、「上手に書けるようになりたい」という気持ちが伝わってきた。

6年生の授業実践においても、十分音声に慣れ親しむために行った読みの指導により、児童は「書くこと」へのハードルを下げ、負担感なく活動に取り組むことができた。また、「読み手意識」を持たせることで、「書くこと」の目的を明確にすることもできた。このよう

に、ていねいに「書くこと」の活動に入っていくことが、小学校での「書くこと」の指導では大切であると考えます。そして、「入門期で文字を扱う際は、正確さに固執しすぎず、流暢さ (fluency) とのバランスを整えていくことが重要となる」(中村, 2015) と述べられているように、児童が間違えを恐れて「書くこと」を嫌いになってしまうようなことは避けたいと考える。

5. おわりに

小学校での実践を通して、「音声」や「読み手意識」を用いた指導が有効であることが分かった。高校での「書くこと」の指導にこれらを生かし、さらに「自分の考えを表現することができる力」にまで伸ばしていく方法の検証については、次年度の課題としたい。

引用文献

- ベネッセ教育総合研究所. 2014. 「中高生の英語学習に関する実態調査 2014」. [http://berd.benesse.jp/up\\_images/research/Teenagers\\_English\\_learning\\_Survey-2014\\_ALL.pdf](http://berd.benesse.jp/up_images/research/Teenagers_English_learning_Survey-2014_ALL.pdf) 2018.01.11
- 文部科学省. 2016. 平成28年度「英語教育改善のための英語力調査事業 (中学校)」報告書. [www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/1388654.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1388654.htm) 2018.01.11
- 文部科学省. 2009. 『高等学校学習指導要領』.
- 文部科学省. 2017. 「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」.
- 文部科学省. 2017. 『小学校学習指導要領』. 『中学校学習指導要領』.
- 長瀬慶来・長瀬恵美. 2013. 「山梨市小学校英語特区の概要と評価基準について—グローバル評価基準 CEFR を中心に—」. 『山梨大学教育人間科学部紀要』. (15). 378-385.
- 中村典生. 2015. 「文字との出会いをどうするか」. 『初等教育資料』. (929). p.p.71-72.
- 野呂忠司. 2007. 「第3章第4節 小中連携と文字指導」. 『小学校英語と中学校英語を結ぶ—英語教育における小中連携—』. 高陵社書店 p.107.